

原動力は中世から積み重ねられてきた地域愛!! 球磨川と共に創る安心して住み続けられるまち

未曾有の水害から雄々しく
立ち上がりつつある人吉市

県都・熊本市から南下すること約70 km。

熊本県南部に広がる人吉盆地に位置し、宮崎県えびの市や鹿児島県伊佐市とも境を接



水害から1年8カ月後の令和4年3月27日、市制施行80周年と市庁舎落成式の合同記念式典が挙行され、市制81年目のスタートに花を添えた

する人吉市は、昭和17(1942)年2月11日、旧球磨郡人吉町・西瀬村・藍田村・中原村の1町3村の合併により、県内3番目の市として誕生した。

令和4(2022)年2月11日には、市制施行80周年の節目を迎え、同年5月には、待望久しい新市庁舎が供用開始された。人吉市の次なる節目、市制施行90周年・100周年に向けた歩みは、新市庁舎と共にスタートすることになったのだ。

自然災害などが発生した折には、今後、心強い災害対策拠点(平常時には防災拠点)ともなる新市庁舎。それがこの時点で供用開始されたことは、今も「令和2年7月豪雨」災害からの復旧・復興事業の最中にある人吉市および市民には、いろいろな意味で「近未来に向けた復興」への弾みとなる出来事だったのではないだろうか。

人吉市を中心とする人吉球磨地域の歴史の最大の特徴の一つは、鎌倉時代初期に地

まつおかはやと
松岡隼人
人吉市長



頭に任命された「相良氏」の支配が、明治時代の初期の廃藩置県に至るまで約700年間も続いたことにある。結果的に全国でもまれな、多彩かつ一貫した文化や伝統の蓄積が、人吉球磨地域全域で継承されてきた。

その希少性と、都市としての特徴的な在り方は、人吉城跡(国指定史跡)や青井阿蘇神社(本殿など5棟の建造物が国宝指定、さらに棟札1枚、銘札5枚が附指定)をはじめ、熊本県内の日本遺産認定第1号「相



国宝・青井阿蘇神社と建築家・隈研吾さんが設計した「青井の杜国宝記念館」(令和5年全館開館)は、復興後の人吉市観光の目玉の一つ



球磨川沿いに築城された人吉城跡。令和2年7月豪雨の被災からの修復を経て、再び一般公開され人気を集めている

良700年が生んだ保守と進取の文化「日本でもっとも豊かな隠れ里―人吉球磨―」にまつわる、数多い構成文化財の存在など

からも明らかだ(※日本遺産認定は同制度初年度の平成27/2015年、対象自治体は旧人吉藩を構成していた、人吉市・錦町・あさぎり町・多良木町・湯前町・水上村・相良村・五木村・山江村・球磨村)。

同時に、人吉市と球磨郡一帯で古くからまちづくりが行われ、多彩な文化が醸成されてきた背景には、人吉市域北部を10km以上にわたり貫流する、日本三急流・球磨川の存在がある。

古来、球磨川の豊かな水資源と付随する農業生産力、交通・物流拠点としての機能などの恩恵が、地域にもたらされてきたことが大きく影響しているのだ。

一方で、流域のエリアは、球磨川が水量豊富な急流であるが故の幾多の甚大な水害にも、見舞われてきた。実際、人吉市の歴史年表を見ると、随所に「水害」の文字が刻印されている。

前述の「令和2年7月豪雨」(氾濫は7月3〜4日未明にかけて発生)は全国的にも大きな被害(死者の総計は全国で80人以上、うち球磨川全流域で50人以上)をもたらした。とりわけ、球磨川の本流・支流が各所で氾濫した人吉市では、災害関連死を含む21人の死者や、約518haにも及ぶ市域が川水に浸かったことにより、市全体の約2割に当たる住家3398世帯が全・半壊・浸水被害に見舞われるなど、甚大な被害が記録されている。

写真にもあるように、その浸水地域の広さは、河川氾濫の経験の乏しい地域の人々が見たら「想像を絶するもの」に映るだろう。実際、令和2年7月豪雨による氾濫は、歴史年表に記された過去の大水害(寛文9/1669年洪水や昭和40/1965年洪水)と同等かそれ以上の規模だったことが、各種資料で明らかにされている。

しかし、令和2年7月豪雨から3年7カ月目に当たる本年2月に公表された、「令



和6年3月市議会定例会施政方針」における復旧・復興関連の項目や「令和6年度予算」の予算配分などを見ると、中心市街地地区や観光交流面での拠点となる青井阿蘇神社のある青井地区の復興まちづくりなど、市内各所で行われている復旧・復興関連の事業は、既に順調な進捗(しんちよく)を示していることがよく分かる。

さらに、被害のとりわけ大きかった中心市街地地区、青井地区、麓・老神地区が連携しての将来ビジョンと位置付けられる「まちなかブランドデザイン推進方針」に関する事業が予算にも盛り込まれており、復旧・復興が中心だったまちづくり事業が、近未来ビジョンを目指す「復興のその先のフェーズ」を、しっかりと反映したものになりつつあることもうかがえる。



球磨川の水が中心市街地を覆い尽くした令和2年7月豪雨。水勢のすさまじさが一目瞭然で分かる

850年以上も前からまちづくりが始まり、球磨川の恩恵を受けながらその基盤がつくられ、発展してきた人吉の人々にとっても、球磨川による水害は大変に難儀なことだったはずだ。水害の減少は永遠の目標であるのも事実だろう。半面、水害のたびに立ち上がってきた歴史のなせる業なのか。今回の人吉市への訪問では、複数の市民に直接取材する機会を持たたが、その際に「球磨川がいくら氾濫して、どれほどの被害が出て、球磨川を悪く言う人は、地元にはほとんどいません」と異口同音に答えてくれたのが、とても印象的だった（※取材／本年3月14日）。

「それは実際、市民の方たちの本当の気

持ちだと思えます。球磨川と共に生きてきた人吉の人々にとって、球磨川へのそうした思いは、DNAレベルとでもいえるような、自然な感情だからです」



100年以上の歴史を持つ「球磨川くだり」は被災後の休業を経て、本年4月6日から「清流コース」が3年9カ月ぶりに再開

生まれも育ちも人吉市で、人吉市議会議員（2期）を経て、平成27年4月に行われた市長選に出馬し、初当選。市長就任から2期6年目に発生した令和2年7月豪雨以降、現在まで既に1期分に当たる足かけ4年間にわたり、復旧・復興事業をけん引してきた松岡隼人市長（3期10年目）も、迷うことなくそう語った。

「令和2年7月豪雨においては、約3400世帯の市民の住まいが浸水被害に遭い、全半壊しました。青井阿蘇神社も観光ホテルも、レトロなまち並みで知られる中心市街地の飲食店なども軒並み被災しています。それは確かに、人吉市の市街地を形成している建物の多くが、球磨川の近くにあることによる結果です。同時に、神社もホテル

も球磨川の近くに立地していることで、さまざまな恩恵を受けることができてきたということをも意味しています。

だから生活再建をする場所も、元の場所が望ましいと考える人が多い。借金をしても、またこの地で頑張ろうという意欲も生まれてくる。よその土地の方々からは、想像が付きにくいかもしれませんが、それが人吉市の大方の市民にとっての球磨川なのです」

地域愛の源・球磨川と共に生きる 人吉市と人吉市民

球磨川に対する市民の思いは、令和3（2021）年3月策定の、「人吉市復興計画（第1期）」に掲げるスローガンが、「球磨川と共に創る みんなが安心して住み続けられるまち」であり、サブタイトルが「希望ある復興を目指して」であることからもうかがえる。

「令和2年7月豪雨は、人吉市における現状の課題を解決するべく策定した『第6次総合計画』に基づくまちづくりを開始した直後に発生しました。その上同時は、コロナ禍の影響が多方面にわたっていたことなどとも相まって、本市経済においても市民生活においても、大変なダメージを負うことになりました。

そのため、まずは市民の生活再建のため



球磨川の中州を活用した交流拠点「中川原公園」の復旧工事も着々と進んでいる

にできることはすぐにやる、できることからとにかくやる、というような必死の思いで、被災された方たちの日常を取り戻すことを目標に、全力で復旧・復興事業に取り組んできました。そして、豪雨被害から8カ月後ようやく、『人吉市復興計画』(実施期間は令和2/2020年度末〜令和5/2023年度)を策定できたことで、復旧・復興事業を、より計画的に進めることができるようになったのです。

その後、第二期となる人吉市復興計画は令和6年度から第6次総合計画に組み込み、一本化することで『未来を見据えたまちづくり』の一環として、復興事業を位置付けることができるようになりました」

今回の取材では、人吉市内を貫流する直線距離で10km以上の球磨川沿いの道をレンタサイクルで踏破するとともに、隣接する相良村や錦町方面などにも足を延ばした。

それは主に、令和2年7月豪雨で流失した第三セクター《くま川鉄道》(主要株主は人吉市を筆頭に、あさぎり町、多良木

町、球磨地域農業協同組合、湯前町など)の第四橋梁・復旧工事の様相を撮影するためだった。同時に球磨川を軸に、たくさんのおまちや集落が開けてきたという歴史の一端を、集落ごとに追体験しながら、なぞるような思いのする道行きともなった。日本遺産のタイトルにある、まさに「豊かな隠れ里」のような静謐で美しい集落が、沿岸の随所に展開しているのだ。

人吉市には、八代駅(熊本県八代市)を起点に人吉市までは球磨川沿いを走る《JR肥薩線》(人吉駅から先は山越えになる)と、JR人吉駅に隣接する人吉温泉駅を起点に、湯前駅(湯前町)へと至る総延長24・8kmの《くま川鉄道・湯前線》が走っている。

令和2年7月豪雨では、両路線合わせて3カ所の橋梁の流失(球磨川の全流域を合わせると17橋梁が流失)など、甚大な被害を受けた。くま川鉄道・第四橋梁の流失は代表的な事例で、取材時には流失した橋梁の土台づくりが行われており、そばの土手には曲がったままの線路も残されている



レールが引きちぎられ、橋桁ごと流失した「くま川鉄道・第四橋梁」の復興は令和7年度中の予定だ

た。洪水時の球磨川が発揮する、膨大な水のエネルギーを、改めて目の当たりにさせるような光景だった。

こうした甚大な被害のため、全線運休せざるを得なくなったくま川鉄道は、本年5月現在、人吉温泉駅〜肥後西村駅までが鉄道運休・代替バス運行となっており、肥後西村駅〜湯前駅までは部分運行が再開している。

前述の第四橋梁の復旧工事およびくま川鉄道の全線運行再開は、令和7(2025)年度中の達成を目標に進められている。肥薩線においては、起点の八代駅から人吉駅も含む吉松駅(鹿児島県始良郡湧水町)までの区間が今も不通となっている。

球磨川および国道の復旧・復興工事(川底



令和3年11月28日、くま川鉄道は肥後西村駅～湯前駅間で部分運行が再開された(湯前駅での記念イベント)

公民館の復旧が完了し、被害の大きかった5町内会には日本財団の支援により、新たに『みんなの家』と名付けられた公民館が令和5年中に整備(建て替え)されました。また、被災市街地復興推進地域である青井地区および中心市街地地区の一部区域で、土地区画整理事業が始まっています。これは令和2年7月豪雨により甚大な被害を受けた両地区の災害に強

にたまった土砂のしゅんせつや流路の改善、堤防の修復、流失した橋梁の架け替えなどは、国土交通省九州地方整備局が主体となって実施されているが、先にも触れたように、人吉市における市民の生活再建事業や、市街地の復旧・復興工事も順調に推移している。

「例えば生活再建の面から見ると、令和3年3月末の段階で931世帯分の応急仮設住宅が設置され、被災者が入居していましたが、本年1月末の段階では202世帯に減少しています。また、今回の豪雨では市内27地区で公民館が浸水被害を受け、各町内会の交流事業ができない状態が続いていました。しかし、そのうち22町内会では

いまちづくりとして、都市基盤を整備するために取り組む事業ですが、これに加え新たなにぎわいの場づくり、交流拠点づくりなどの事業も一体的に取り組んでいます。このことは、民間の方たちの投資を呼び込むための『場／空間づくり』ともいえます。



令和2年7月豪雨は球磨川の本流・支流の各所に被害をもたらした(支流・川辺川での治水工事)



流失した公民館は「みんなの家」として新築・再建された(温泉町地区)

こうした復旧・復興事業の複合的な動きは、市民の生活再建への支援と近未来の新たな発展に向けた取り組みが、同時に進行する『未来を見据えたまちづくり』の一環になりつつあること、典型的な事例といえます」

コミュニティの再生を基盤に目指す 近未来のまちづくり

さらに、青井地区や中心市街地地区における、土地区画整理事業が、「未来を見据えたまちづくり」に直結する効果をより発揮していくための原動力となることが予測される、国道445号改築事業も、青井地区で同時に始まっている。

「国道445号は一部未改築の部分が残さ

れており、長年の懸案・課題となっていました。しかし、青井地区の土地区画整理事業と同時に改築工事が着工されたことにより、今後は大規模災害時の緊急輸送道路(命を守る道)としても、非常に大きな、心強い効果を得られることが期待されます」

令和2年7月豪雨からの復興は、当然、取材後も時々刻々と進みつつある。例えば、復興の推進力として不可欠な観光面というと、100年以上の歴史を持ち、人吉市および球磨川観光で最も人気のあるアクティビティの一つ「球磨川くだり」は、被災後の休業を経た後、一時は部分運航(清流復興コース2.5km)にこぎつけたものの、台風などの度重なる悪天候により、運航休止を余儀なくされていた。しかし、取材(本年3

月14日)後の本年4月6日には、ゴールデンウィークの到来を前に、本来の「清流コース」(全長4.5km)がついに再開されている。

復旧・復興事業に不可欠な行政と市民との強い連携関係を物語る事例としては、復興計画を推進する過程で次々と実施されてきた、市民協働による各種の「にぎわい創出事業」が挙げられる。

例えば、人吉市出身で、自身も実家が浸水被害に遭った経験を持つマルチタレントの内村光良さんは、時間の経過と共に変わっていく街の風景を残したいとの思いから、球磨川と共に生きる人吉市を舞台にした、ダンスに打ち込む高校生たちを主人公とする青春映画を企画。人吉市の全面協力の下、地元の人吉高校、南稜高校の生徒たちを含む、多くの市民がエキストラとして参加する短編映画『夏空ダンス』を製作・公開(撮影は令和4年8月、九州地方では令和5年6月に先行公開、同年9月には全国公開)して、大きな反響を呼んだ。

また、球磨川沿いの中心市街地をウォーキングしながら防災を考える「防災アスロン」の実施、被害を受けた中小企業者や小規模事業者の早期の事業活動再開のため、店舗・事務所等の集合型仮設商店街「モゾカタウン」や、被災後のまちなかのにぎわいの拠点と位置付けたコンテナ型の商店街「コンテナマルシェ」において、まちなかのにぎわいづくりを目的とする「HITONOWAマー

ケット」などのイベントが随時開催されるなど、にぎわいづくり、および交流機会の創出がさまざまな形で図られてきた。

「その間には水害とコロナ禍の影響で、規模を縮小しての開催となっていた市民待望の《おくんち祭》(※青井阿蘇神社の秋の例大祭/おくんち神事行事)や、真夏の恒例イベント《人吉花火大会》なども、次々に完全復活しています。

行政が肅々と進める復興事業と、市民や民間事業者を主役とするそうした一つ一つの復興への活発な動きが互いにかみ合っていくことによって、私たち人吉市にとっての最大の命題である『球磨川と共に創る みんなが安心して住み続けられるまちづくり』は、一歩ずつ、一歩ずつ、進んでいくのだと考えておりま

す」
復興計画が未来を見据えたまちづくりと一体化した「第6次総合計画」の実施期間は令和9(2027)年



令和5年6月24日に開催の「くまもと復興映画祭 球磨川特別編2023」には内村光良さんも参加、内村さんが人吉市を舞台に製作した『夏空ダンス』が先行上映された



コロナ禍と水害の影響で規模の縮小が余儀なくされていた祭礼の復活は、市民の士気を大いに高める効果を発揮している(写真は青井阿蘇神社・おくんち祭と人吉花火大会)



までだ。しかし「球磨川と共に創る みんなが安心して住み続けられる人吉市のまちなか」は、球磨川からもたらされる新たな恩恵と共に、その後もさらに熟成を重ねていくことだろう。
(取材:文||遠藤隆/取材日||令和6年3月14日)